

富山県射水郡大島町

水上・本開発遺跡

— 近世北陸道発掘調査報告 —

2000年

大島町教育委員会

巻首図版



近世北陸道（東から）

富山県射水郡大島町

水上・本開発遺跡

— 近世北陸道発掘調査報告 —

2000年

大島町教育委員会

序 文

本書は、宅地造成事業に伴い平成9年度に実施した、水上・本開発遺跡、近世北陸道の発掘調査報告書であります。

加賀藩2代藩主前田利長は慶長14年(1609)高岡に築城し、ここを居所としたため高岡を通る迂回路を開き、寛永17年(1640)に富山藩が分封されてからは、富山城下を通過しない街道整備を進めてきました。それが近世北陸道「下街道」と称される街道であります。水上・本開発遺跡は、県内で唯一近世北陸道が良好に遺存している遺跡であります。県内平野部をとる近世北陸道は、ほとんどが舗装化、もしくはその経路自体がほ場整備事業により消滅しており、過去に発掘調査を実施した事例がありません。その為、調査の結果、判明した成果が今後の学術研究の一助となり、その基礎資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査の実施にあたり、ご援助並びにご協力頂きました山徳不動産開発株式会社・地元住民の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、深く感謝申し上げます。

平成12年3月

大島町教育委員会
教育長 亀谷 慶英

例 言

- 1 本書は、民間宅地造成事業に先立ち実施した、富山県射水郡大島町本開発地内に所在する水上・本開発遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は、山徳不動産開発株式会社に委託を受けて、大島町教育委員会が実施した。調査に当たっては富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受け指導と協力を得た。
- 3 調査事務局は大島町教育委員会事務局生涯学習係に置き、学芸員田中 明が調査事務を担当し、事務局長草野信正が総括した。
- 4 調査期間・面積・担当者は以下のとおりである。
調査期間 平成10年2月25日～同年3月31日(延べ17日間)
調査面積 1,000m²
調査担当者 大島町教育委員会 生涯学習係 学芸員 田中 明
富山県埋蔵文化財センター 企画調整課 文化財保護主事 高梨清志
- 5 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、調査担当者がこれにあたった。
- 6 現地調査ならびに資料整理にあたって、下記の方々からご協力を頂いた。記して謝意を表したい。
岸本雅敏・宮田進一・池野正男・神保孝造・島田修一・越前慶祐(順不同・敬称略)
- 7 現地調査にあたっては、社団法人大島町シルバー人材センターの協力を得た。また、山徳不動産開発株式会社から調査事務所・重機・調査器材等について多大なご協力を頂いた。記して厚く御礼申し上げる。
- 8 本書の挿図・写真図版に用いた方位は磁北、標高は海拔高である。なお、遺構の標記にあたっては略号を用いた。使用した略号は下記のとおりである。
SF：道路、SD：溝、SK：土坑
- 9 本書で用いた土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(1997年版)に準拠している。
- 10 出土品ならびに記録資料は、大島町教育委員会が保管している。
- 11 資料整理業務の参加者は下記のとおりである。
中村恭子(囑託)・高瀬直子・畠山りえ子

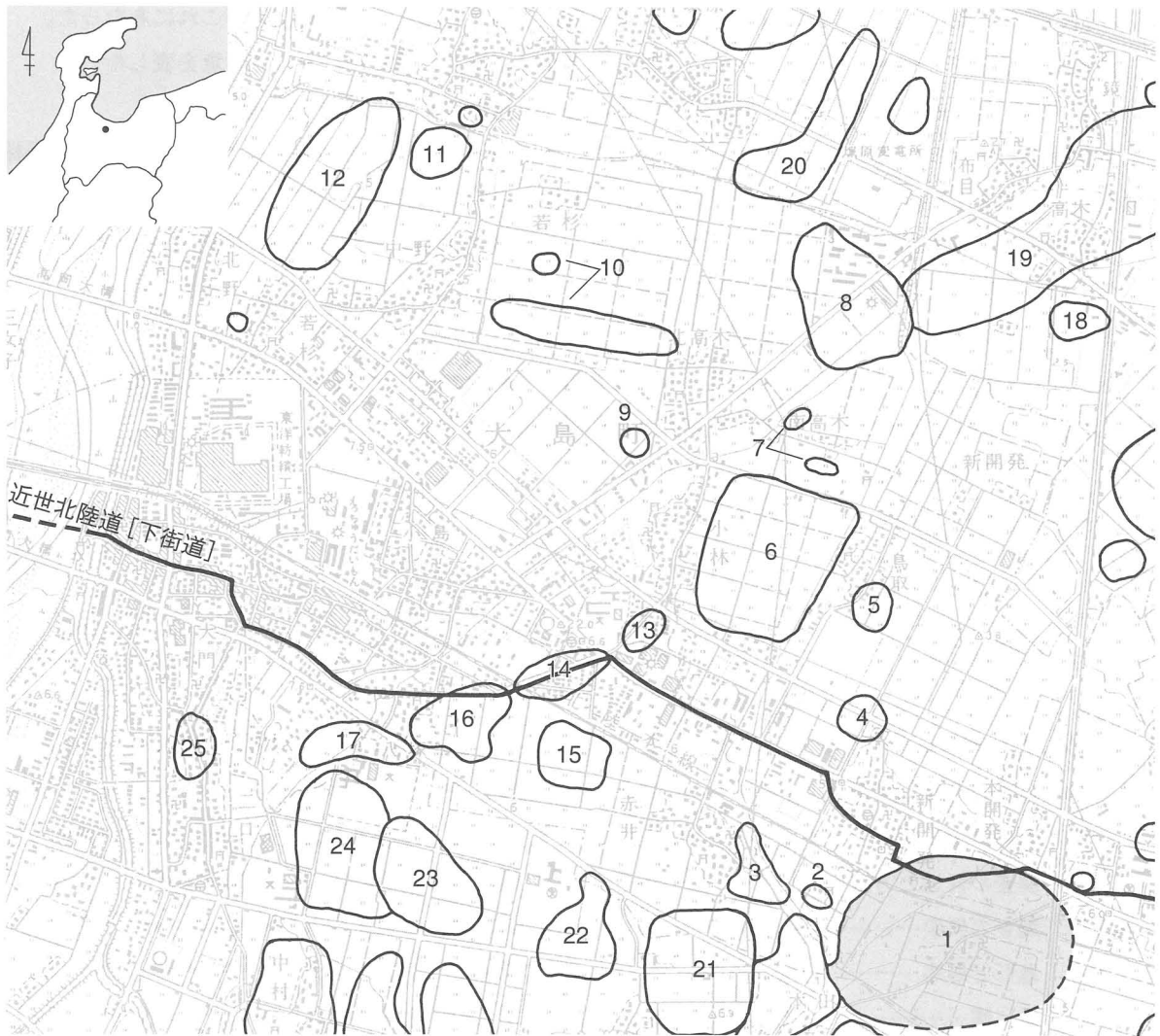
目 次

第1章 位置と環境……………	1	第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡……………	1
第2章 調査の経緯と経過……………	2	第2図 調査区位置図……………	3
1 調査に至る経緯……………	2	第3図 遺構断面図……………	5
2 調査の経過と方法……………	2	第4図 遺構配置図・遺構断面図……………	6
第3章 調査の概要……………	4	第5図 近世北陸道断面図……………	8
1 地形と層序……………	4	第6図 遺物実測図……………	11
2 遺 構……………	4	第7図 遺物実測図……………	12
3 遺 物……………	10	第8図 遺物実測図……………	13
第4章 考 察……………	14	第9図 近世北陸道変遷図……………	15
引用・参考文献……………	17	第10図 近世北陸道概念図……………	16

第1章 位置と環境

大島町は富山県の西部域に位置し、庄川右岸に広がる沖積低地である射水平野にその町域を形成する。この沖積低地は約6,000年前（縄文時代前期）には、今は富山新港となっている放生津潟が射水丘陵まで広がる湖底であった。その後気候の寒冷化に伴い、庄川・和田川・神楽川・下条川・鍛冶川などの諸河川によって土砂が運ばれ、それが堆積して次第に陸地化し、あちこちに沼地が残る湿地帯となっていくた。現在の大島町は全体に平坦な土地が広がり、標高は3～8mを測る。

水上・本開発遺跡は、大島町本開発地区と小杉町水上地区にまたがり所在する遺跡である。大島町東部に位置し、神楽川と下条川に挟まれた微高地上に立地する。現標高は7m前後を測り、古代から中・近世の散布地である。周辺には、熊野神社遺跡や赤井遺跡などの古代から中世の散布地もあり、当遺跡周辺は連綿と人々が生活を営んでいた地域であるといえよう。また、本遺跡内北方には承応三年（1654）加賀藩主前田利長が整備を進めた近世北陸道の下街道が通っており、交通の要地としても立地していたことがうかがえる。



1. 水上・本開発遺跡 2. 熊野神社遺跡 3. 赤井遺跡 4. 新開発遺跡 5. 鳥取遺跡 6. 小林遺跡 7. 南高木遺跡 8. 北高木遺跡
 9. 小島遺跡 10. 中野遺跡 11. 中野北遺跡 12. 若杉遺跡 13. 小林南遺跡 14. 八塚B遺跡 15. 八塚土田遺跡 16. 八塚A遺跡
 17. 八塚C遺跡 18. 南浦遺跡 19. 高木・荒畑遺跡 20. 沖塚原東A遺跡 21. 安吉遺跡 22. 二口遺跡 23. 二口五反田遺跡
 24. 二口油免遺跡 25. 二口西遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

第2章 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

平成7年8月、大島町教育委員会は民間の不動産業者から、分譲住宅団地造成を目的とした大島町本開発地内の農振農用地からの除外申請を提出するに際して、埋蔵文化財包蔵地の有無、その取り扱いについて照会を受けた。これに対し町教育委員会は、今後の対応につき富山県埋蔵文化財センターと協議を図り、当該申請地が周知の遺跡である水上遺跡の隣接地であることから、事業計画地約47,800㎡を対象とした分布調査を実施することとなった。

平成7年12月、町教育委員会は県埋蔵文化財センターの協力を得て分布調査を実施した。調査の結果、対象地のほぼ全域から遺物が採集され、当該地の北東に隣接する水上遺跡がさらに東側、事業計画地のほぼ全域に広がるものとして捉えられた。この結果をもとに、関係者間で再度協議を行い、遺跡の範囲及び遺存状況等の確認を目的とした試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は、町教育委員会が調査主体となり、県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、平成9年4月に実施した。調査は対象面積約55,000㎡に107本の試掘トレンチを設定し、重機及び人力により地表面下20～60cmの遺構面まで掘り下げ、遺物包含層と遺構の有無を確認した。試掘調査による発掘面積は1,745㎡であった。調査の結果、事業地のほぼ全域から遺構・遺物が確認された。遺構はすべて近世初頭の自然流路や農業用排水の可能性が強く、遺物も遺構に伴わず若干出土したに過ぎなかったため、本調査の必要はなしと判断した。しかし、事業地内に近世北陸道が良好に遺存しているのが確認されたため、事業者には調査結果を報告するとともに、遺跡の保護措置について関係機関と協議を重ねた。協議は、事業の性格上から計画変更による現状保存は困難であり、記録保存を前提とした発掘調査を実施する方向で進んだ。これに伴い町教育委員会では、発掘調査の計画を策定するとともに、その後の工程や開発事業との対応策等について事業者との協議を進めた。平成10年に入り、近世北陸道の約1,000㎡を対象として本調査を実施することで、事業者との協議が合意に達し、早急に調査の事前準備を行うとともに県埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼して、2月下旬から発掘調査に着手することとなった。

2 調査の経過と方法

発掘調査は、まず人力掘削による調査の事前準備として重機による表土・耕作土の除去を、調査員立ち会いのもとに行った。その後、調査対象地の地形・区画にあわせて10m間隔に測量基準杭を打設し（第2図）、10m×10mを一区画とするグリッドを組み、南北方向にX0～60 Y0～120までを設定した。続いて、遺構確認面の精査・遺構の検出を行った。検出した遺構にはマーキングを行い、平板測量による遺構概略図を作成した。次に、遺構に番号を設定し、各々の遺構に適宜、土層観察用の畦を残し掘削を開始した。近世北陸道に関しては、構造・規模等の把握の為、4箇所を断割りを設定し断面観察を行った。遺構掘削後は各遺構の断面を20分の1で実測し図化を行った。遺構掘削・断面図作成後は、遺構の平面全体図を平板測量によって40分の1で実測し図化を行った。各遺構の断面写真は35mmカメラで、出土状況や個別の完掘写真・ブロック写真はプロニー版もあわせて撮影した。調査区の全景写真はラジコンヘリコプターを使用して空中撮影を実施した。撮影終了後は最終レベルの確認・記録、遺物の採集を行った。また、空中写真撮影のために残した畦などはずし、遺構の完掘を確認し、2月25日～3月31日までの17日間（実働日数）にわたる発掘調査を終了した。



第2図 調査区位置図 (1/1,000)

第3章 調査の概要

1 地形と層序

水上・本開発遺跡は、神楽川と下条川によって形成された微高地上に位置する。現況は標高6.5m前後を測り、南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡地は現在、宅地・水田・畑地として利用されている。調査区付近は耕地整理等の地形改変をほとんど受けておらず、遺跡内には近世北陸道が良好に遺存している。

調査区の基本層序について記述する。その層序は概ね5層に区分できる。第1層は灰オリーブ色砂質土で表土・耕作土、第2層は灰色～灰黄色砂質シルト、第3層は黒褐色シルトで、弥生から近世の遺物包含層であり、検出した遺構の主たる覆土となっている。第4層は明青灰色～緑灰色シルトの地山層であり、遺構検出面である。第5層は黒色粘質シルトで腐植を多量に含むピート層であり、遺物の包含は認められない。

2 遺構

検出した遺構は、道路（SF）1条、溝（SD）6条、土坑（SK）4基がある。

道路（第4・5図、写真図版1・2）

S F 0 1

SD 0 1・0 3の溝を両側に側溝として備え、調査区を北東－南西方向に通る近世北陸道の下街道の一部である。全長約90mを検出し、両端とも調査区外へ延びるものである。両側溝間の心々距離は約5～5.5m、道路幅員は約2.7mを測る。今回の発掘調査が始まるまで農道として機能していた道路である。第5図より、約20cm厚の表土直下に直径1～5cm大の円礫層が存在し、近世江戸時代の道路敷であったものと考えられる。この円礫層は、約20cmの厚さを測る。人為的に運ばれ道路敷として使用されたこれらの円礫の、形状又は礫種を調査することができなかつた為、どこの河原より運びこまれたものかを推測することができなかつた。この円礫層下には、約10cm厚の砂質土層が叩き締められたように堅く締まって水平堆積し、盛土構築が施されている。

溝（第3～5図、写真図版1・2）

S D 0 1

道路遺構SF 0 1の南側を併走し、北東－南西方向に延びる溝で側溝と考えられる。幅約180～280cm、深さ約40～70cmを測る。断面形は逆台形状に似た掘り方を呈す。全長約70mを検出し、両端とも調査区外へ延びるものである。覆土は砂質シルト～シルトであり、表土直下より概ね上・中・下の3層に分層される。上・中層には道路敷に使用されていた直径1～5cm大の円礫が混入する。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸・唐津・伊万里・近～現代陶磁器・曲物・下駄・銅銭などが出土している。時期は17世紀後半以降と考えられる。

S D 0 2

X93Y25付近からX78Y26付近に位置する東西方向の溝である。途中で北方向に折れて延びSD 0 1に切られる。幅約80cm、深さ平均15cmを測る。全長約16mを検出。西端は試掘調査のカクランの影響で途切れる。覆土は黄灰色シルトが主体で、一部黒褐色・灰白色シルトが混入する。遺物は弥生土器が出土している。

S D 0 3

道路遺構SF 0 1の北側を併走し、北東－南西方向に延びる溝でSD 0 1同様に側溝と考えられる。幅約100～300cm、深さ約60～100cmを測る。断面形は逆台形状に似た掘り方を呈す。全長約87mを検出し、両端とも調査区外へ延びるものである。覆土は砂質土～砂質シルト～シルトであり、SD 0 1同様3層に分層され、

上・中層には直径1～5cm大の円礫が混入する。道路側の溝肩付近の方が円礫は若干多い。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・珠洲・青磁・白磁・越中瀬戸・唐津・伊万里・近～現代陶磁器などが出土している。時期もSD01同様17世紀後半以降と考えられ、同時期より道路両側に側溝として機能していたものと推測できる。

SD04

X39Y27付近から調査区南西隅へ向かって位置する東西方向の溝である。調査区境に溝が併走している為、溝肩が不明瞭である。全長約16mを検出したが、調査区外へ延びるものである。覆土は黄灰色～灰黄色シルトの単層である。遺物は珠洲が出土している。

SD05

X50Y21付近からX47Y21付近へ向かって西流する溝である。幅約45cm、深さ平均6cmを測る。全長約4mを検出。覆土は黄灰色～灰白色シルトの単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SD06

X52Y23付近からX49Y25付近へ向かって流れる溝である。幅約50cm、深さ平均8cmを測る。全長約3mを検出。断面形は皿状を呈する。覆土は黄灰色～灰白色シルトの単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

土坑 (第3図)

SK01

X94Y15に位置する。規模は長軸115cm、短軸90cmの円形で、深さは最深9cmで断面形は皿状を呈する。覆土は黄灰色～灰白色シルトの単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK02

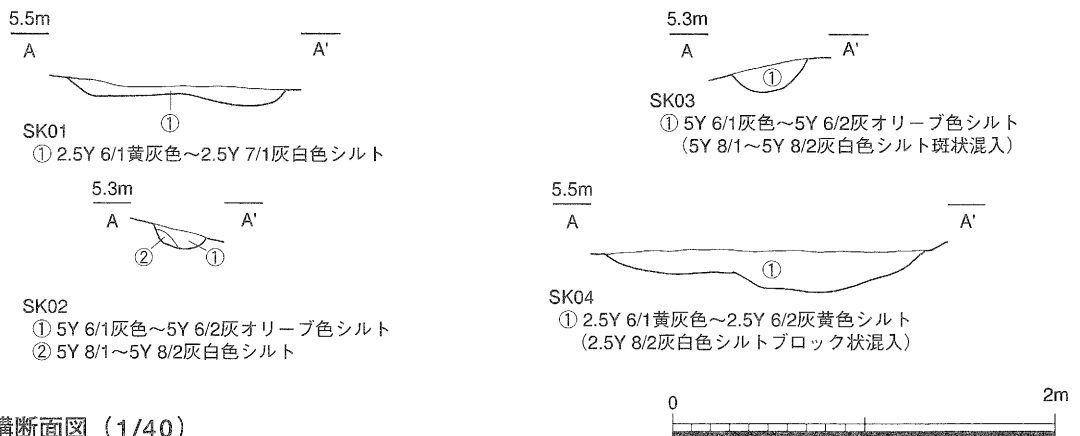
X81Y14に位置する。規模は長軸50cm、短軸30cmの楕円形で、深さは10cmで断面形は逆台形を呈する。覆土は灰色～灰オリーブ色シルトで、下位に灰白色シルトが混入する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK03

X83Y14に位置する。規模は長軸200cm、短軸42cmの楕円形で、深さは14cmを測る。覆土は灰色～灰オリーブ色シルトで、灰白色シルトが斑状に混入する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK04

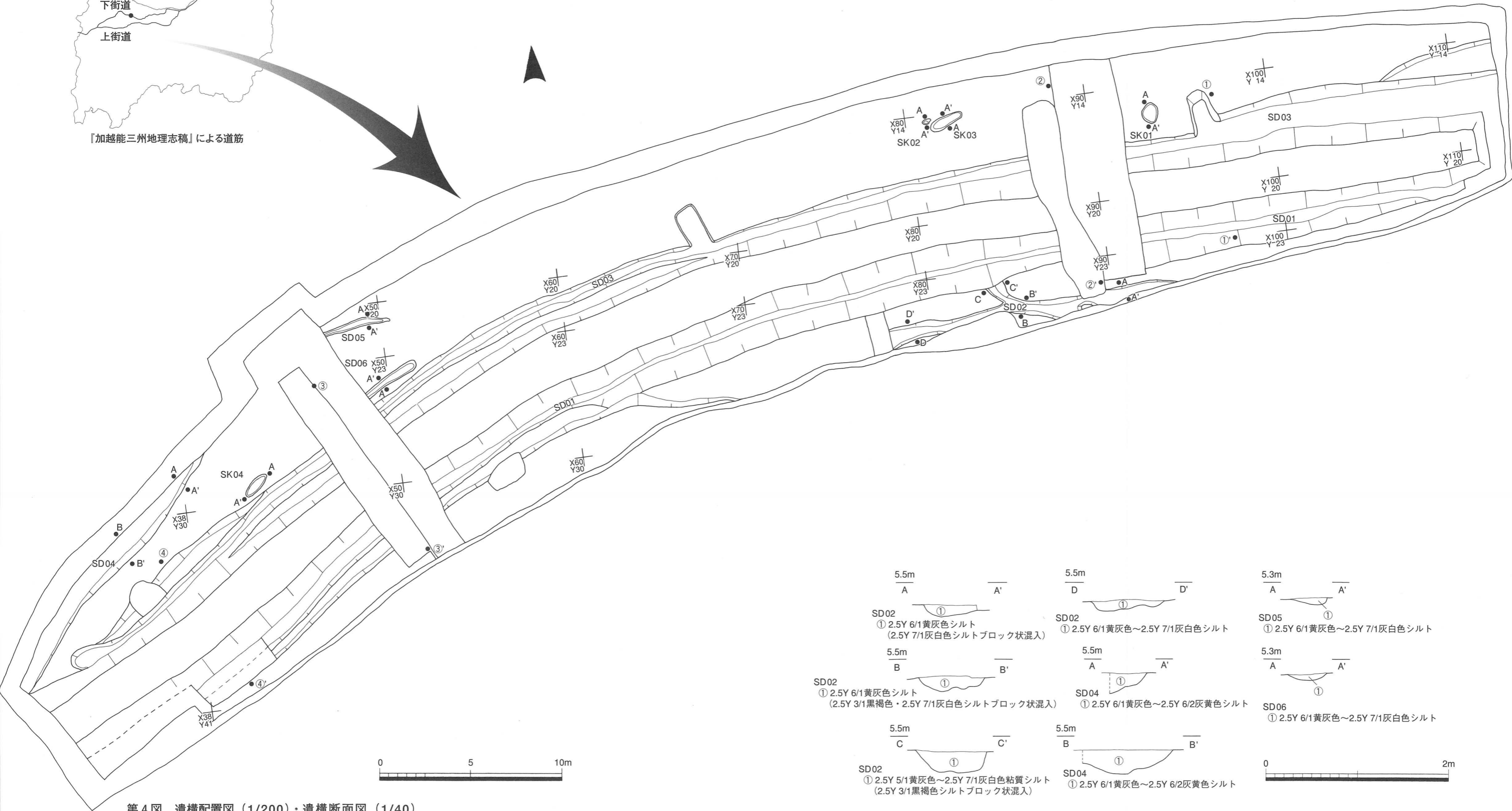
X43Y28に位置する。規模は長軸156cm、短軸60cmの楕円形で、深さは20cmを測る。覆土は黄灰色～灰黄色シルトで、地山である灰白色シルトがブロック状に混入する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



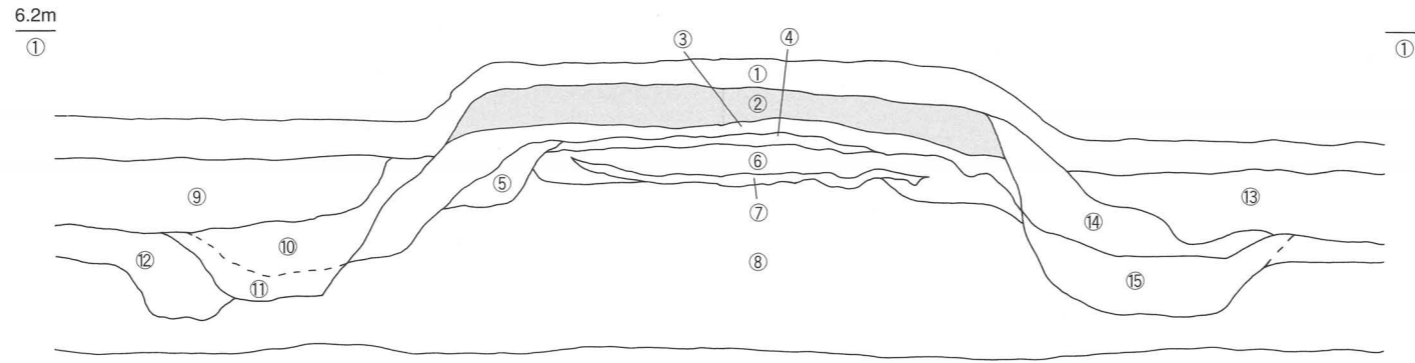
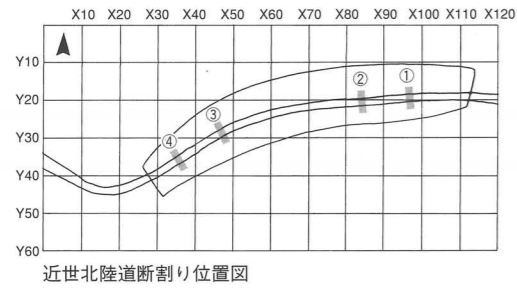
第3図 遺構断面図 (1/40)



『加越能三州地理志稿』による道筋

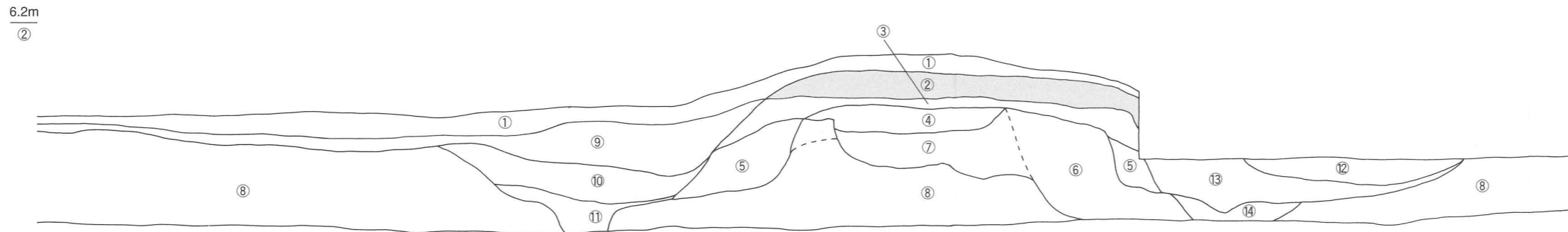


第4図 遺構配置図 (1/200)・遺構断面図 (1/40)



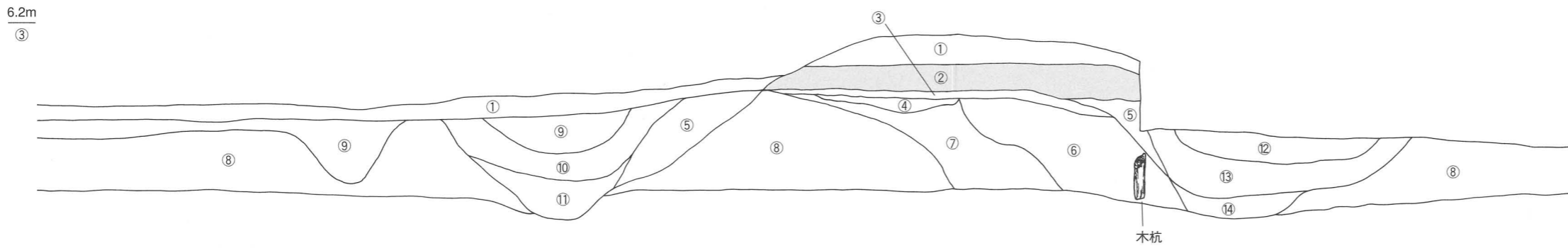
断割り①—①'

- ①5Y4/2~5/2灰オリブ色砂質土[表土]
 - ②礫層[直径1~5cm大の円礫層]
 - ③2.5Y7/3浅黄色~2.5Y8/3淡黄色砂質土
 - ④10YR6/8明黄褐色シルト
 - ⑤2.5Y7/2灰黄色~2.5Y7/3浅黄色シルト
 - ⑥5BG6/1青灰色~5BG7/1明青灰色シルト
 - ⑦5Y6/4オリブ黄色~5Y6/6オリブ色シルト
 - ⑧5BG5/1~6/1青灰色シルト
 - ⑨2.5Y5/2暗灰黄色~2.5Y6/2灰黄色砂質土[円礫混入]
 - ⑩2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
 - (2.5Y7/2灰黄色砂質土ブロック状混入)
 - ⑪5Y5/1灰色シルト(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック状混入)
 - ⑫5Y4/1~5/1灰色シルト
 - ⑬2.5Y5/2暗灰黄色~2.5Y5/3黄褐色砂質土[円礫混入]
 - ⑭2.5Y6/1黄灰色~2.5Y6/2灰黄色砂質シルト[円礫混入]
 - ⑮5Y4/1~5/1灰色シルト
- SD03
SD01



断割り②—②'

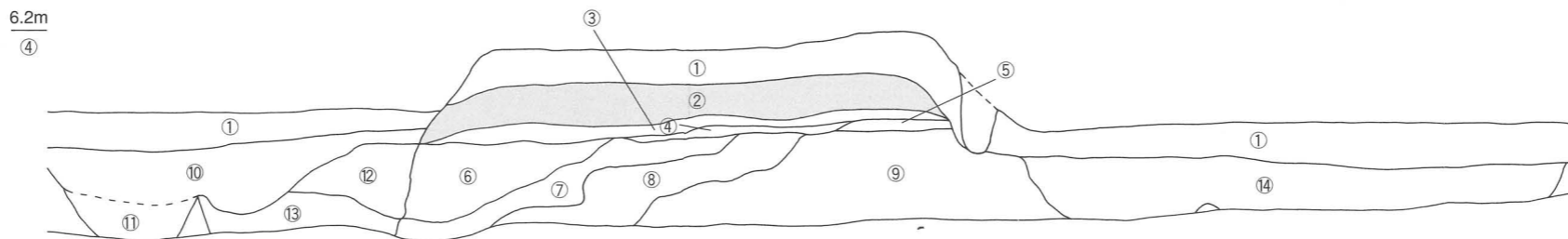
- ①5Y4/2~5/2灰オリブ色砂質土[表土]
 - ②礫層[直径1~5cm大の円礫層]
 - ③2.5Y8/1~8/2灰白色砂質土
 - ④2.5Y7/1灰白色~2.5Y7/2灰黄色砂質シルト
 - ⑤2.5Y6/1黄灰色~2.5Y7/1灰白色シルト
 - ⑥2.5Y5/1~6/1黄灰色シルト
 - ⑦2.5GY5/1オリブ灰色シルト
 - (7.5GY7/1明緑灰色シルトブロック状混入)
 - ⑧7.5GY6/1緑灰色~7.5GY7/1明緑灰色シルト[植物遺体混入]
 - ⑨5Y6/1灰色~5Y7/1灰白色砂質土[円礫混入]
 - ⑩5Y5/1~6/1灰色砂質シルト[円礫混入]
 - ⑪5Y4/1~5/1灰色シルト
 - ⑫2.5Y6/1黄灰色シルト
 - (2.5Y7/1灰白色~2.5Y7/2灰黄色シルト斑状混入)
 - ⑬2.5Y6/1黄灰色~2.5Y6/2灰黄色シルト[円礫混入]
 - ⑭7.5GY4/1暗緑灰色シルト
 - (7.5GY6/1緑灰色シルトブロック状混入)
- SD03
SD01



断割り③—③'

- ①5Y4/2~5/2灰オリブ色砂質土[表土]
 - ②礫層[直径1~5cm大の円礫層]
 - ③2.5Y7/2灰黄色~2.5Y8/2灰白色砂質土
 - ④2.5Y7/1灰白色砂質シルト(10YR6/8明黄褐色シルト帯状混入)
 - ⑤2.5Y6/1黄灰色~2.5Y7/1灰白色シルト
 - ⑥5BG5/1青灰色シルト[やや粘質]
 - (2.5GY5/1オリブ灰色シルトブロック状混入)
 - ⑦5BG4/1暗青灰色~5BG5/1青灰色シルト[やや粘質]
 - ⑧5BG6/1青灰色~5BG7/1明青灰色シルト[植物遺体混入]
 - ⑨5Y6/1灰色~5Y6/2灰オリブ色砂質土[円礫・炭化物混入]
 - ⑩5Y6/1灰色~5Y6/2灰オリブ色砂質シルト[円礫・植物遺体混入]
 - ⑪7.5GY5/1~6/1緑灰色シルト(5BG7/1明青灰色シルトブロック状混入)
 - ⑫2.5Y6/1黄灰色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルト斑状混入)[円礫混入]
 - ⑬7.5GY5/1緑灰色シルト(2.5Y6/1黄灰色シルトブロック状混入)[円礫混入]
 - ⑭7.5GY5/1緑灰色シルト(10G7/1明緑灰色シルトブロック状混入)
- SD03
SD01

..... 礫層



断割り④—④'

- ①5Y4/2~5/2灰オリブ色砂質土[表土]
 - ②礫層[直径1~5cm大の円礫層]
 - ③2.5Y7/1~8/1灰白色砂質土
 - ④10YR5/8黄褐色シルト
 - ⑤2.5Y7/2灰黄色~2.5Y7/3浅黄色砂質シルト
 - ⑥5Y4/1~5/1灰色シルト
 - ⑦7.5GY5/1~6/1緑灰色シルト(5Y4/1灰色シルトブロック状混入)
 - ⑧7.5GY5/1~6/1緑灰色シルト
 - (5BG7/1明青灰色シルトブロック状混入)
 - ⑨5BG7/1明青灰色シルト
 - ⑩2.5Y5/3黄褐色~2.5Y6/3にぶい黄色砂質土[円礫混入]
 - ⑪2.5Y6/1黄灰色~2.5Y6/2灰黄色シルト
 - ⑫2.5Y6/2~7/2灰黄色シルト
 - ⑬5Y6/1灰色~5Y7/1灰白色シルト[円礫混入]
 - ⑭5Y5/1~6/1灰色シルト(2.5Y7/2灰黄色シルトブロック状混入)
- SD03
SD01



第5図 近世北陸道断面図(1/40)

3 遺物

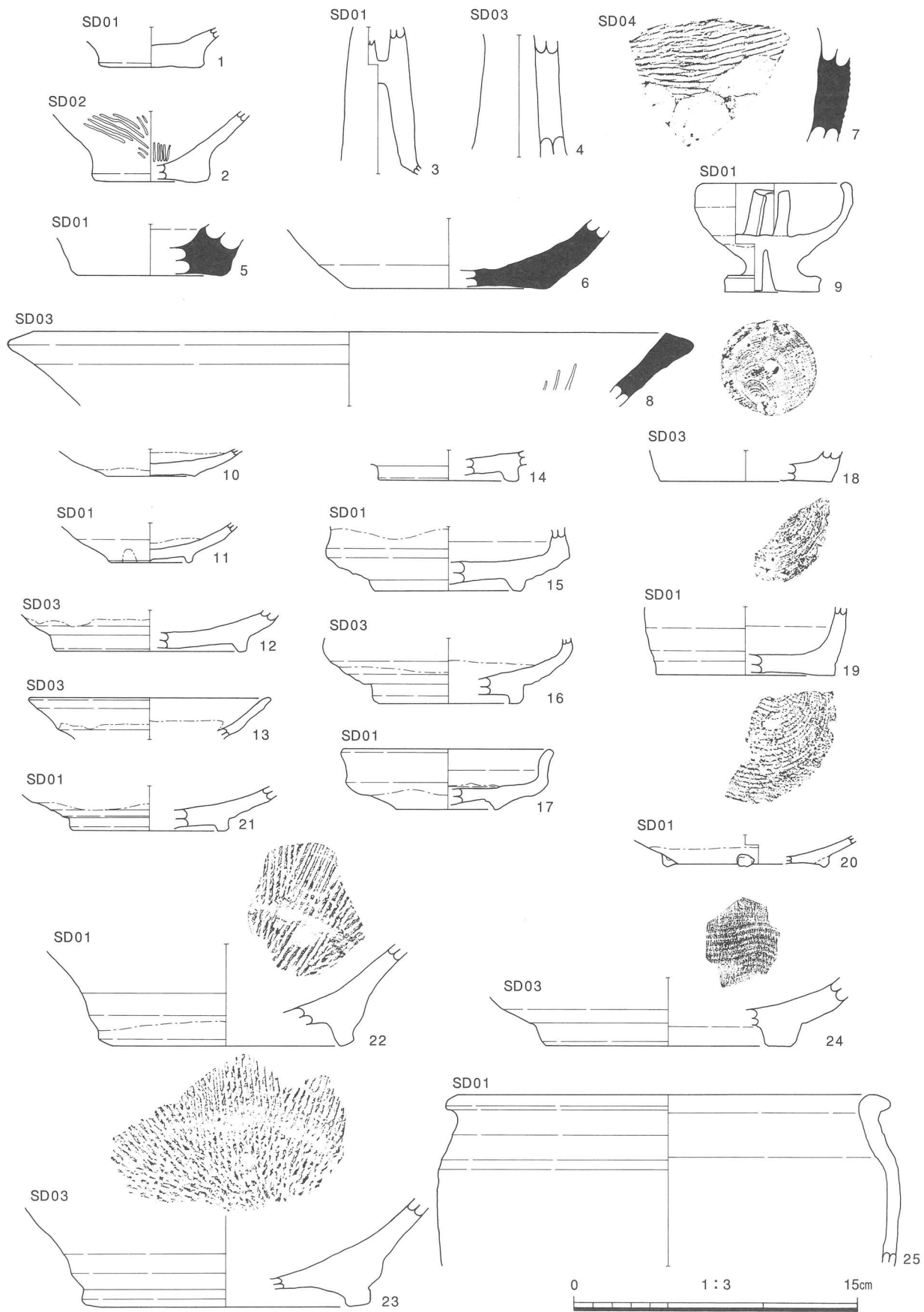
出土した遺物には、土器類・磁器類・木製品・金属製品などがあり、時代的には弥生時代・中世・近世のものが認められる。その主体となる時期は17世紀後半から19世紀前半代にあり、18世紀代の遺物量が最も多い。以下、図示した遺物を中心にその概要をみる。

土器類（第6図・第7図48・第8図49、写真図版4・5） 土器類には、弥生土器、珠洲、瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津がある。第6図1～4は、いずれも弥生土器の壺・甕・高杯の小破片で、全容を知り得る個体は無い。2は壺あるいは甕の底部片で、外面に刷毛目調整があり底径6.1cmを測る。S D02より出土。3・4は高杯の脚部片である。これらの帰属時期は弥生時代終末期の所産と考えられる。同5～8は珠洲で甕（5～7）、播鉢（8）がある。7は甕の胴部片である。S D04より出土。8は播鉢の口縁部で口径33.2cmを測る。内面に卸目が見られる。これらの帰属時期は珠洲編年第IV期前後の所産と考えられる。同20は瀬戸美濃の行平鍋か。底部外面に煤が付着している。同9～19は越中瀬戸で燭台（9）、皿（10～13）、碗類（14～16）、鉢（17）と、匣鉢（18・19）がある。9は胴部内外面に鉄釉が施され、脚部が無釉の燭台である。見込みには幅6mm～1cmの燈心立てがつく。底部に糸切り痕を残す。10は底部外面に墨痕がある。11は底部削り出し高台の鉄釉皿である。17世紀後半～18世紀前半代の所産と考えられる。S D01より出土。17は口縁部が屈曲して直立し、口縁中央から外反するいわゆる「向付」の鉢形態で、削り出し高台をもつ。登窯期（17～18世紀）の所産と考えられる。内外面に鉄釉が施されるが、見込みと外面体部から底部は無釉である。見込みに釉止めの段をもつ。S D01より出土。18・19は錆釉を施す匣鉢で、底部に糸切り痕を残す。19世紀前半代の所産と考えられる。同21～25、第7図46・48第8図49は肥前系陶器（唐津）で皿（21・46）、播鉢（22・23・48）、大鉢（24・49）、甕（25）がある。22は播鉢の底部で内面に3.5cm幅の原体で卸目が密に施され、内底面に砂目跡を残す。46は内野山窯の青緑釉小皿の破片であり、18世紀前半代の所産と考えられる。48は口径34.8cmを測る。24・49は褐色の素地に白土を刷毛で塗り、縞状の文様を施す刷毛目唐津の大鉢の底部である。49は内底面に砂目跡を残す。底径16.0cmを測り、S D01より出土。

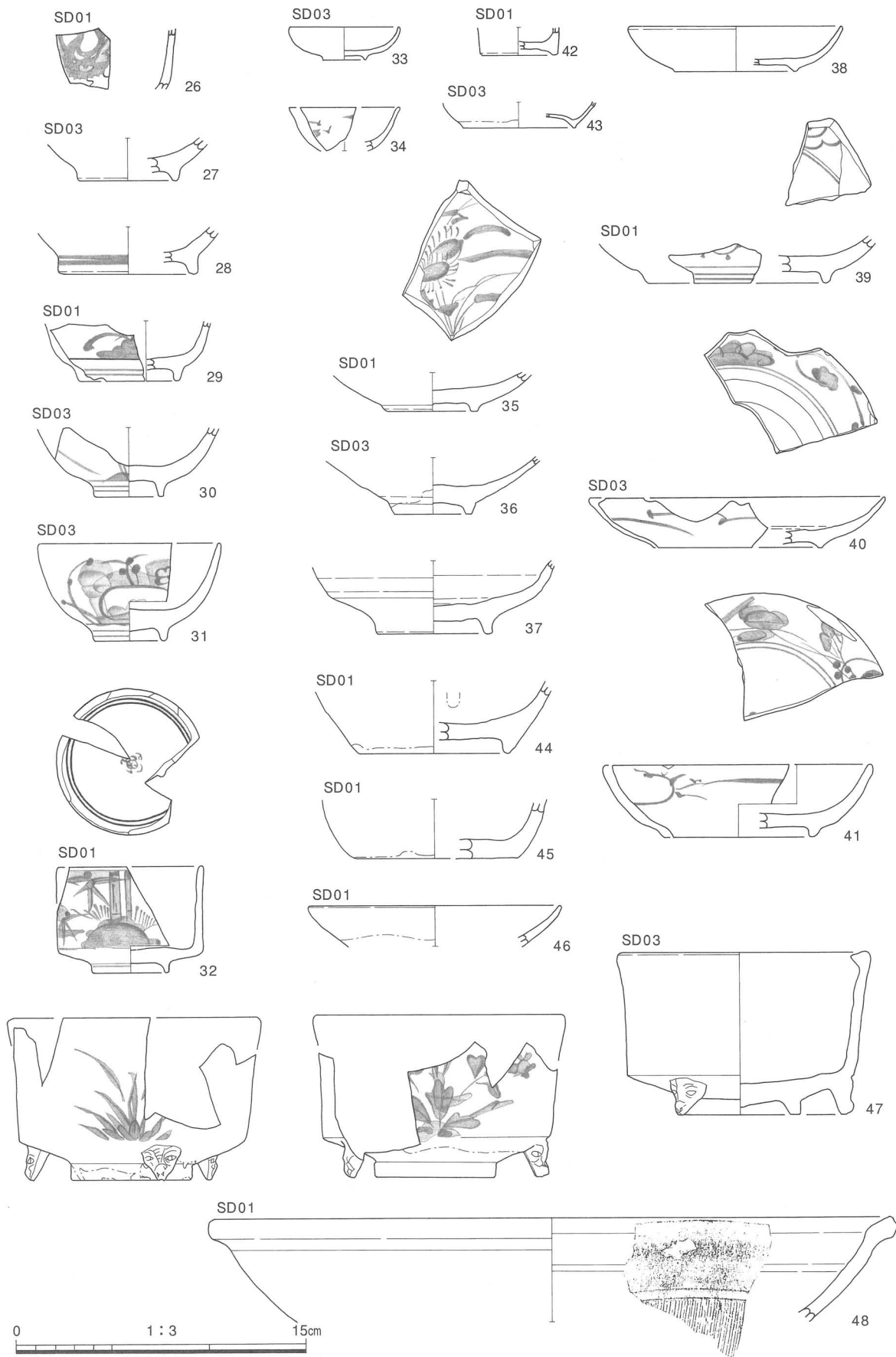
磁器類（第7図、写真図版3） 磁器類には、肥前系磁器（伊万里）がある。第7図26～43・47は肥前系磁器（伊万里）で碗（26～32）、紅皿（33）、盃（34）、皿（35～41）、香炉（47）がある。26は団鶴のコンニャク印判を用いた染付碗の小破片である。18世紀後半代の所産と考えられる。S D01より出土。31は体部外面に梅樹文を施した染付碗であり、いわゆる「くらわんか碗」と呼ばれる飯碗である。口径9.2cmを測り、S D03より出土。32は体部外面に竹笹文、内底面にコンニャク印判による五弁花を施した筒型の湯飲み碗である。18世紀後半代の所産と考えられる。33は口紅や頬紅を溶かすのに使った紅皿か。S D03より出土。34は盃か。35は内面に草花文が施された染付皿である。高台下面は釉剥ぎされ、周辺に砂が付着している。呉須から鑑みて17世紀後半代の所産と考えられる。S D01より出土。36は高台および底部が無釉となり、内底面に蛇の目釉剥ぎが施されている。染付はなく、18世紀前半代の所産と考えられる。40は内外面に草花文を施し、内底面に蛇の目釉剥ぎが施されている。口径15.0cmを測り、S D03より出土。19世紀前半代の所産と考えられる。47は外面草花文を施し、三足が獣の顔をしている獣脚をもつ香炉である。17世紀後半～18世紀前半代の所産と考えられる。

木製品（第8図、写真図版5） 木製品には、容器、服飾具がある。50は柄杓か。51は台裏に溝を切り、歯をはめ込む差歯下駄である。前壺の周辺は使用時の指圧痕が残り、右足用と考えられる。後壺・後歯に一部欠損がみられる。前後歯の底面には、小砂利の食込みが著しい。S D01より出土。

金属製品（第8図、写真図版5） 金属製品には、銭貨（銅銭）がある。52～55は寛永通宝であり、一文銭で背無文。S D01より出土。

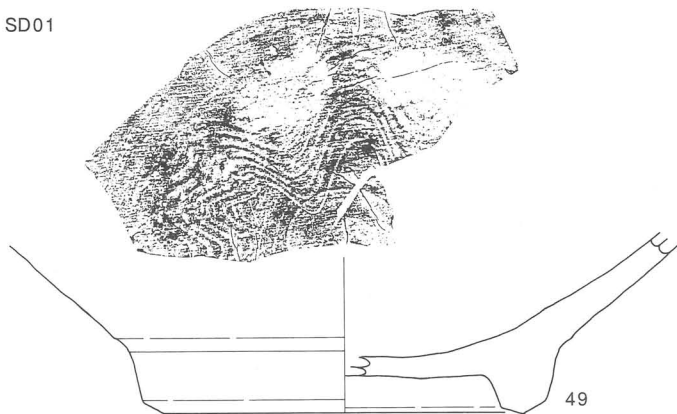


第6図 遺物実測図 (1/3) ※遺構番号表記のないものは、表土ないし包含層からの出土



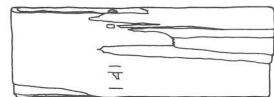
第7図 遺物実測図 (1/3) ※遺構番号表記のないものは、表土ないし包含層からの出土

SD01



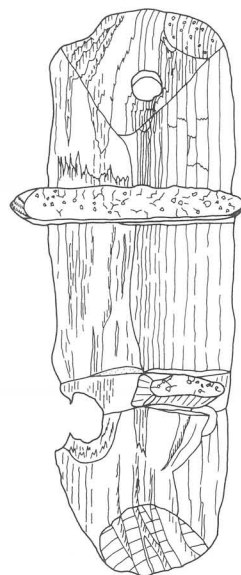
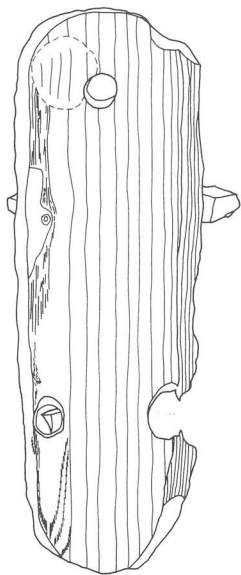
49

SD01

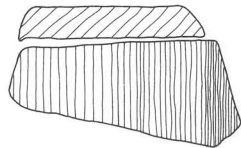


50

SD01

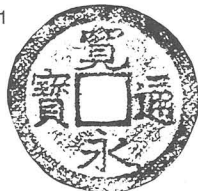


51



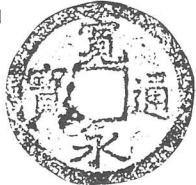
0 1:3 15cm

SD01



52

SD01



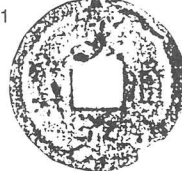
53

SD01

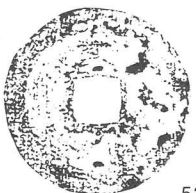
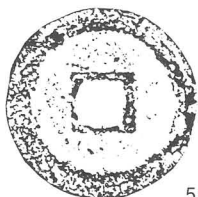


54

SD01



55



0 1:1 15cm

第8図 遺物実測図 (49~51 1/3、52~55 1/1)

第4章 考 察

1 北陸道の歴史的な位置付け

北陸道は、7世紀後半に律令国家が中央集権的な国家体制を維持する為には、中央と地方とを緊密に且つ急速に連絡する為の整備された交通網が必要であったことを機に、全国に東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道を整備したなかの一つである。『延喜式』によれば、越中国には坂本・川人・日理・白城・磐瀬・水橋・布勢・佐味の8駅が記述されている。駅路については、俱利伽羅峠を越え、坂本駅家（小矢部市蓮沼付近か）から川人駅家（高岡市石堤から福岡町赤丸付近か）へと、小矢部川左岸の山麓沿いを北東方向に進み、日理駅家（高岡市守護町付近か）、高岡市伏木にある越中国府方面へ延びていたものとされている。県内での古代北陸道の検出例には小矢部市桜町遺跡や高岡市麻生谷新生園遺跡等が報告されている。中世における北陸道は、荘郷の領主的支配のもとで交通路も分断的に支配されざるを得なかった為に、史料上の制約にもよるが経路を正確におさえることは難解とされている。近世における北陸道は、戦国大名が各々領国内に整備していた交通路を、江戸幕府が幕藩体制を保持する為の江戸を中心とする交通体系への改編整備を受け始めた。特に寛永12年（1635）の参勤交代制確立後に益々進行した。

今回発掘調査を実施した近世北陸道とは、越中国に数多く存在する街道のなかで下街道と称されたものである。この下街道は、慶長14年（1609）に加賀藩主前田利長が高岡に築城し居所とした為の高岡を通る迂回路として整備され始めたものである。寛永17年（1640）に富山藩が分封されてから、加賀藩は富山城下を通過しない街道整備を開始する。調査区を通過する下街道は、承応3年（1654）に戦乱時の移動速度を鈍らせ、高岡城東方の防衛用戦術機能を目的に整備され、神楽川防衛線「本開発の七曲り」と称された、まさにその地なのである。この下街道は文政13年（1830）『加越能三州地理志稿』には官道として記述され、昭和10年（1935）国道開通に至るまでの約280年、重要な交通路として存続していたものである。

2 近世北陸道の規模

発掘調査の結果、4箇所を断割りをもとに道路使用部分として捉えた幅員の推定を試みた。断割り①：約2.8m、②：約2.7m、③：約2.6m、④：約2.8m、この結果平均して約2.7mの幅員を推定することができる。近世北陸道の幅員に関しては、『越中道記』正保4年（1647）「道幅式間」（約3.8m）と記述されている。この頃下街道は未整備段階であり、7年後の承応3年（1654）まで期間があった。其のため、推定幅員約2.7mと合致する結果とはいかないものの、「道幅式間」（約3.8m）が直接下街道の幅員を示す値ではないこと。推定幅員値が道路使用部分として捉えた幅員であるが、この「道幅式間」（約3.8m）が街道整備段階の道路幅を示すのか、道路使用部分として捉えた幅員のいずれであるかの確証がないこと。又、調査区は軍事的戦術機能を備えた「本開発の七曲り」であること等、諸要因より多少の誤差も考えられるが、大幅にかけ離れたものとは考えにくいし、敢えてやや狭く整備したのではないかとすら考えられる。では、今回の推定幅員値約2.7mという幅は、実際通行可能な幅であったのかどうかという点が問題となってくる。その前にはまず、近世北陸道には何が通行していたのかを考えなくてはならない。まず考えられるものは、人・駕籠・馬・牛等が挙げられるだろう。しかし、最も基本となるのはやはり人の通行が一番ではないかと考える。そうすると人の通行必要最低幅がどれほど必要かが重要視されてくる。現在大島町を通過する旧国道の歩道幅はちなみに約2.5mを測り、推定幅員値約2.7mと比較すると若干狭い結果となった。となると、現代の歩道幅より広い幅員を呈した近世北陸道とは、人の通行という視点で考えると決して狭い幅ではなく、官道だけに人々の往来程度には十分な規模の道路であったことが裏付けられるのではないだろうか。

3 近世北陸道の変遷

近世北陸道の変遷について、第9図に示した6段階を概ね考えてみた。以下、各段階別に記述する。

①近世北陸道整備前では、両側に側溝を備えるような大規模土木工事を伴う道路はなかったにしろ、以前より道路の存在が考えられる。それは近世北陸道が本開発村の原集落が存在したとされる調査区の小字孝心を通過しているということ。本開発から隣の新開発へ向かう地内でかなり湾曲していること等を考えると、村々を繋ぐ集落間の連絡道路が元来存在し、後に街道として整備されたのではないかと考えられるからである。他に調査区の道路上は地山が微妙に高い位置にあり、近世以前の遺構による地形の改変を余り受けていないことも要因の一つではないかと考える。

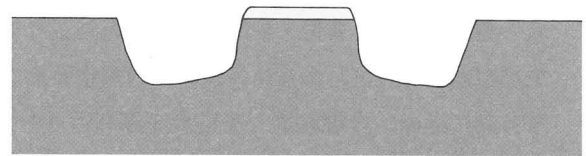
②近世北陸道整備期は、承応3年(1654)以降の17世紀中頃に比定される。地山面を水平に削り出し、約5~20cm厚の砂質土を水平に盛土し約1.5~1.8mの道路幅員を造り出している。それと同時に両側に側溝を掘削している。道路敷に敷かれた砂質土や側溝は路面の排水機能を考慮し、随時路面がぬかるまない為の防止策と考えられる。この段階の道路敷に円礫が敷かれていた可能性は否定できないものの、側溝覆土に円礫の混入が確認されなかったことより、敷かれていなかった可能性が高いと考えられる。この道路幅員段階は短命なものであったのではないかと考える。

③近世I期は、17世紀後半~18世紀前半代に比定される。この17世紀後半に街道の大規模拡幅が実施されていると考える。②街道整備期に掘削された側溝が覆土で埋没する為、さらに幅・深度のある側溝を拡幅し掘削している。その際、旧側溝覆土の土留め用かと思われる木杭が拡幅された側溝との境目より検出された。旧道路敷上面にて平坦面を造ると、約10cm厚の砂質土を水平に盛土し堅く叩き締め、約3m幅の平坦面を造り出している。その砂質土上に直径1~5cm大の円礫を約20cm厚で敷き詰め、約2.7mの道路幅員を造り出している。近世の土盤改良の如く、道路敷がより排水性に優れた設計に基づき整備されたと考えられる。拡幅前の約1.5~1.8m幅員では人々の往来には充分であるが、馬・牛等がすれ違うには少々狭いように思われる。ではなぜ当初より幅員の広い街道を整備しなかったの

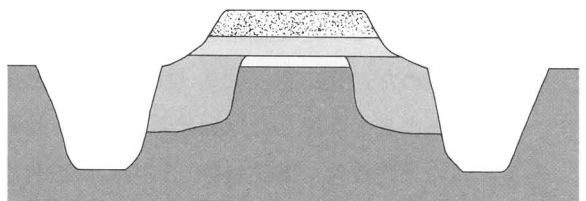
① 街道整備前



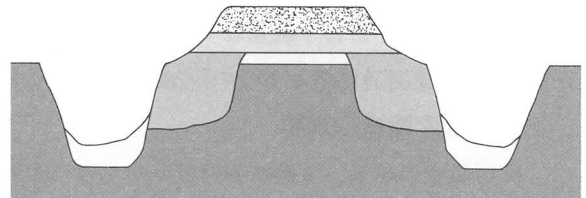
② 街道整備期 (17C中頃~17C後半)



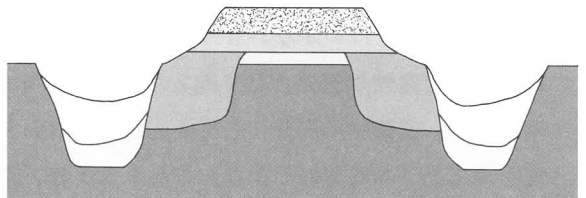
③ 近世I期 (17C後半~18C前半)



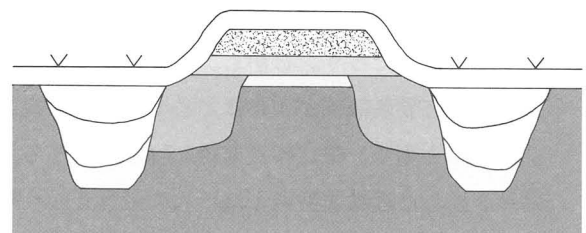
④ 近世II期 (18C前半~18C後半)



⑤ 近世III期 (19C前半~)



⑥ 街道終焉期



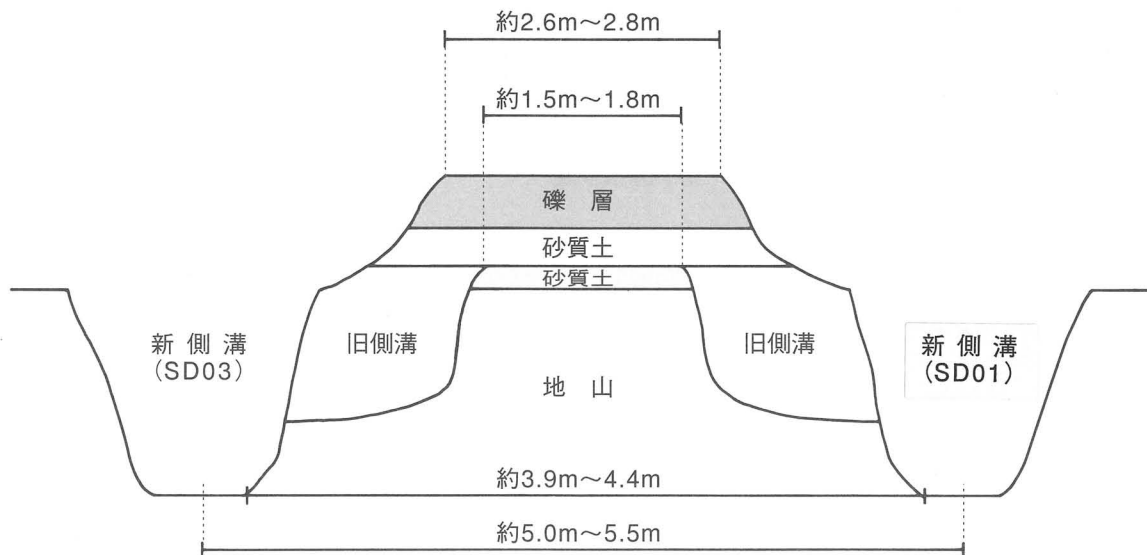
第9図 近世北陸道変遷図

かは疑問が残る。そこには現代が抱えるような財政問題が影響していたのだろうか。新しい側溝底部の覆土には殆ど円礫の混入が確認されない為、円礫が敷かれる以前に拡幅された街道の共用が一先ず開始されていた可能性が考えられる。この拡幅整備により新旧2段階の道路敷が存在していたものと判断することができる。拡幅整備を終え新しい街道として使用されていた期間を、側溝より出土した遺物の所産時期・産地の比率より概ね3時期あるものと捉え、それと共に側溝が埋没していく変遷も辿りながら以下記述する。この段階では側溝出土遺物には越中瀬戸が最も多く、他は唐津・初期伊万里が若干混入する程度である。

④近世Ⅱ期は、18世紀前半～18世紀後半代に比定される。側溝覆土に最も円礫混入をみる時期で、踏み固められる前に流れ込んだものか、幾度となく円礫の敷き直しを実施していた可能性が考えられる。しかし、断面観察からは判断し兼ねる。この段階での側溝出土遺物は18世紀前半代では③近世Ⅰ期と類似した傾向を示すが、18世紀後半代に入ると伊万里に主流が変化し、越中国内に大衆化していく傾向を如実に現している。当時、大衆の日常雑器の流行転換期がこの時期に起こったものと考えられる。

⑤近世Ⅲ期は、19世紀前半代に比定される。側溝覆土に混入する円礫は人々の往来を経て踏み固められた為か、円礫の敷き直しがなされなくなった為か、直径約1cm大の小粒円礫が若干混入するにとどまる。側溝規模は、幅の縮小・深度上昇にも拘らず、再掘削の痕跡は見受けられない。これは幕藩体制の崩壊が迫るにつれ街道を整備する情勢ではなくなってきたことに起因しているためか。この段階での側溝出土遺物は18世紀後半代からの傾向が続き伊万里が主流を占めている。しかし、他の越中瀬戸・唐津や在地系の陶磁器も混在し始めるので、大衆の流行が一様ではなくなり多様化してきたものと考えられる。

⑥近世北陸道終焉期では、⑤近世Ⅲ期以降現代に至るまで全体的に約20cm平均の表土が堆積し、街道はほぼ原形のままパックされたかの如く、両側溝共々埋没状態となっている。明治11年(1878)10月1日に明治天皇がこの街道を通過されたとの記述があるが、果たしてその頃側溝は埋没せずに排水機能を果たしていたのかどうかは定かではない。明治22年(1889)町の前身大島村誕生、明治32(1899)鉄道(官営北陸線)の開通等、情勢が目まぐるしく変化していくなかでも北陸道は存続している。大正12年(1923)越中大門駅開設の年、調査区「本開発の七曲り」を乗合バスが運行していたとの記述があることからそれが伺える。そうすると実際いつまで街道としての役割を担っていたのかが問題となるが、恐らくは昭和10年(1935)国道8号線(現:県道富山高岡線)の開通に至るまでと考えられる。この国道の開通により、承応3年(1654)に前田利長整備開始以来約280年の永きにわたる使命を終えたといえよう。



第10図 近世北陸道概念図

引用・参考文献

- ア 青木一彦他 1996 「射水平野の遺跡－古代の北陸道を探る－」『大境』第18号 富山考古学会
赤塚次郎他 1990 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- イ 飯田充晴 1993 「道路築造方法について」『古代交通研究2』 古代交通研究会
伊藤隆三 1994 「小矢部市発掘の推定北陸道」『季刊考古学』第46号 雄山閣
- オ 近江俊秀 1997 「道路跡一覧」『古代交通研究7』 古代交通研究会
近江俊秀 1997 「古代道路遺構の形態からみた、その性格」『古代交通研究7』
古代交通研究会
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』 ニューサイエンス社
大橋康二 1988 『古伊万里』 別冊太陽63 平凡社
大平奈央子他 1998 『善徳寺前遺跡発掘調査報告』城端町教育委員会
- カ 川名 登 1992 「交通と運輸」『ヴィジュアル百科江戸事情 二巻』 雄山閣
- キ 木下 良他 1980 『富山県歴史の道調査報告書－北陸街道－』 富山県教育委員会
京田良志他 1994 『大門町歴史の道調査報告書』 大門町
- ク 久々忠義 1991 『富山県 大島町荒畑遺跡発掘調査概要』 大島町教育委員会
- サ 坂井誠一他 1979 『富山県史 資料編Ⅳ 近世』 富山県
- シ 島田修一他 1998 『八塚C遺跡－民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告－』 大島町教育委員会
新宅輝久 1999 「近世北陸道遺跡の調査から」『富山考古学研究』第2号 (財)富山県文化振興財団
- タ 高瀬 保 1990 「宿駅制の成立と西猪谷口留番所を通行した人と物」『加賀藩流通史の研究』
竹脇久雄他 1989 『大島町史』 大島町
田島龍太他 1988 『馬部甚蔵山遺跡』 唐津市教育委員会
棚元理一他 1993 『北陸街道と新開発集落』 大島町教育委員会
- ニ 西山太郎他 1986 『大関大曲遺跡・柳沢牧・御成街道発掘調査報告書』 印旛郡市文化財センター
- マ 松原隆治他 1992 『勝川遺跡Ⅲ』 愛知県埋蔵文化財センター
丸山雍成 1989 「五街道と脇街道」『日本近世交通史の研究』 吉川弘文館
- ヤ 山口辰一 1988 『八丁道遺跡調査概要Ⅰ』 高岡市教育委員会
山口辰一 1989 『八丁道遺跡調査概要Ⅱ』 高岡市教育委員会
山口辰一 1990 『八丁道遺跡調査概要Ⅲ』 高岡市教育委員会
山口辰一他 1998 『市内遺跡調査概要Ⅷ』 高岡市教育委員会
山本正敏他 1998 『五社遺跡発掘調査報告』 (財)富山県文化振興財団
- ヨ 吉岡康暢 1989 『珠洲の名陶』 珠洲焼資料館

写真図版



近世北陸道（西から）

写真図版 1

1. 遺跡遠景
(東から)



2. 調査区全景
(上空から)



3. 近世北陸道
(西から)



写真図版 2

1. SD03 (西から)



2. SF01 ③-③'
(西から)



3. SF01 ②-②'
(北から)



4. SD01 (西から)



5. SD01遺物出土
状況 (西から)



6. SF01礫層堆積
状況 (西から)

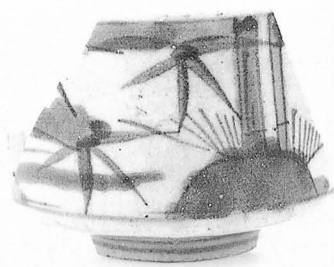


7. SF01横断面
状況 (西から)





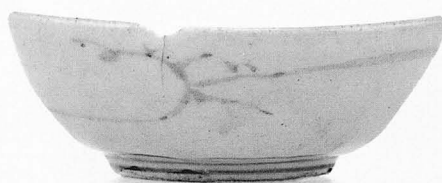
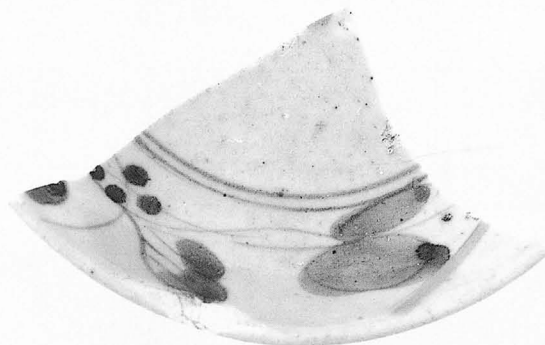
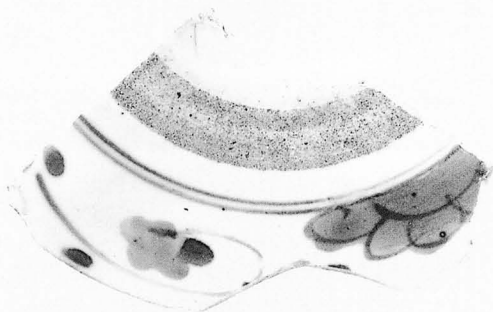
47



32



31



40

41



34



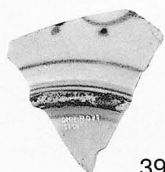
26



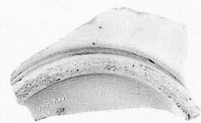
33



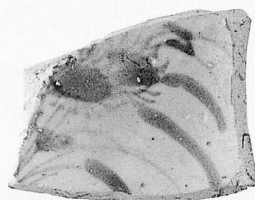
29



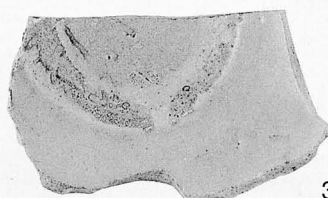
39



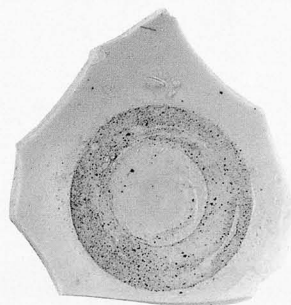
28



35



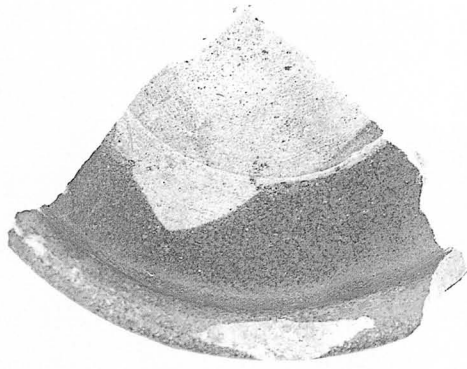
37



36

写真図版 4

越中瀬戸
唐津 (近世)



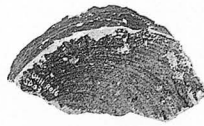
17



9



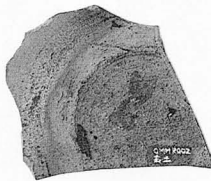
13



18



14



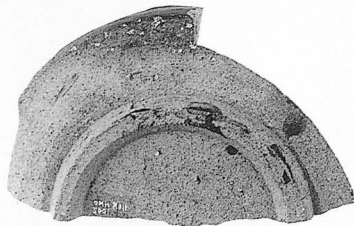
10



11



16



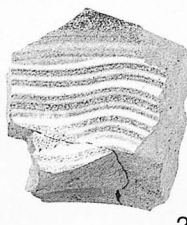
15



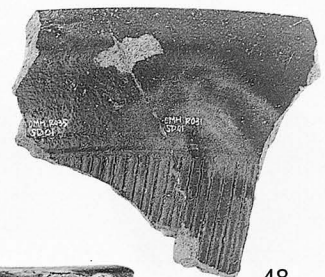
12



21



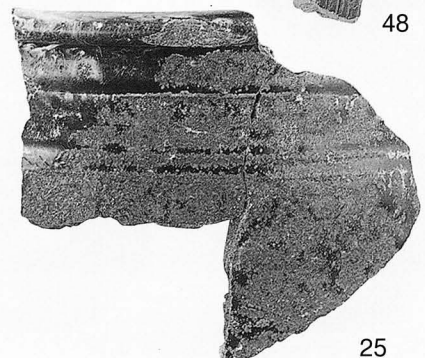
24



48



22



25

写真図版 5

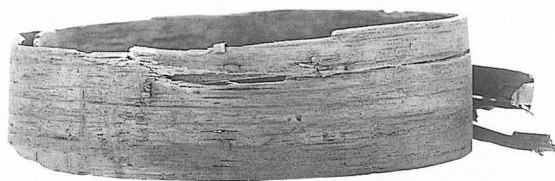
唐津

木製品

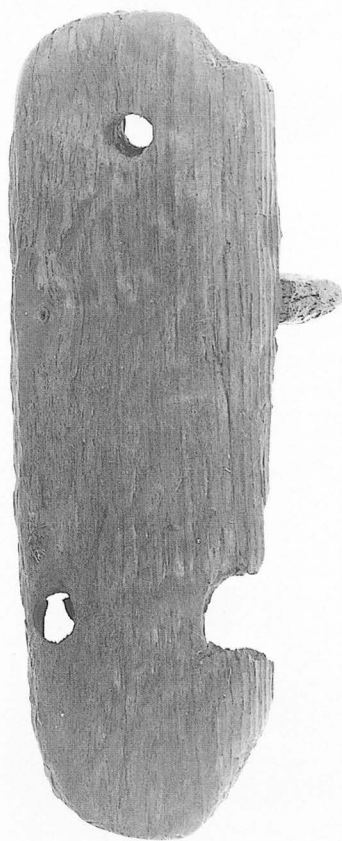
金属製品 (近世)



49



50



51



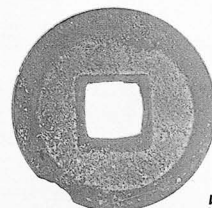
52



53



54



55

報 告 書 抄 録

ふりがな	みずかみ・ほんかいほついせき							
書名	水上・本開発遺跡							
副書名	近世北陸道発掘調査報告							
編著者名	田中 明							
編集機関	大島町教育委員会							
所在地	〒939-0292 富山県射水郡大島町小島703 TEL 0766-52-3854							
発行年月日	西暦2000年 3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / ''	° / ' / ''		m ²	
みずかみ ほんかいほつ 水上・本開発	とやまけん いみずぐん 富山県射水郡 おおしままち ほんかいほつ 大島町本開発	16382	067	36度 30分 10秒	136度 59分 10秒	19980225～ 19980331	1,000	民間宅地 造成事業 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水上・本開発	集落跡	弥生時代	溝1条		弥生土器			
		古代			土師器・須恵器			
		中世	溝1条		珠洲			
		近世以降	道路1条(北陸道) 溝4条 土坑4基		伊万里・唐津・越中 瀬戸・木製品・金属 製品			

富山県射水郡大島町

水上・本開発遺跡 — 近世北陸道発掘調査報告 —

2000(平成12)年3月31日 発行

編集・発行 大島町教育委員会

〒939-0292 富山県射水郡大島町小島703 TEL 0766-52-3854

印刷 日興印刷株式会社

〒939-8241 富山県富山市黒崎高木割72 TEL 076-422-2121

